

その 16

万葉ファンタジア

「家持黄泉がえり」



鳥取公演の舞台から

「天皇(すめろぎ)の 御代(みよ)栄えむと 東(あづま)なる 陸奥山に 金(くがね)花咲く」

(天皇の 御代が栄えるであろうと 東国の 陸奥の国の山に 黄金の花が咲いた)

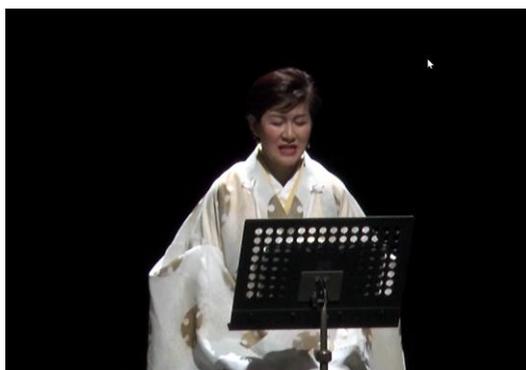
大伴家持(巻 20・4097)

これまで 6 回にわたって、上総国、下総国、安房国の房総 3 国、現在の千葉県に因んだ万葉集の今、「万葉集ナウ」を見てきた。そこで今回は、その隣国東京、かつての武蔵国に舞台を移すことにしたい。移動にあたっては、下総国は市川真間辺りから、太日川(ふとひがわ)、現在の江戸川の矢切の渡しを使って、武蔵国に入るのも一興だが、それでは当たり前すぎて面白くない。そこで、「万葉ファンタジア」の第 2 弾として、文字通りファンタジア、幻想的な舞台の手法を使って、武蔵国に入ることにしたい。

2020 年 8 月、東京は浅草公会堂で公演予定だった音楽朗読劇「YAKAMOCHI」は、突発的な事情とその直後に起こったコロナ禍により、脚本の段階でやむなく中止に追い込まれたが、今回のファンタジアは、その脚本の冒頭部分に相当する。浅草公演演出担当の山崎清介氏はシェークスピア劇の演出家で、そのファンタジックな演出プランに基づき書いた脚本に、今回万葉ファンタジア向けに手を入れたものである。

万葉ファンタジスタ大伴家持は、その波乱に満ちた 68 年の生涯を、陸奥は多賀城で閉じることになるが、その家持を、言霊と楽の精霊が、黄泉の国から現世に呼び戻すところから、ファンタジアは始まる。

公演が実現すれば、出演は語りの「言霊の精霊」が目下人気沸騰の女流浪曲師玉川奈々福氏、音楽の「楽の精霊」は世界的なロックギタリスト山本恭司氏、そして、家持役が狂言の和泉元彌氏の予定だった。



言霊の精霊 玉川奈々福



楽の精霊 山本恭司

物語は、ロックギターの激かな響き、家持「金花咲く」の歌のコーラス、そして言霊の精霊の語りから始まる。

陸奥は、仙台の隣、多賀城市にある多賀城の一郭。時は、延暦4年、西暦785年8月28日、陸奥按察使（みちのくあぜち）持節征東將軍（じせつせいとうしょうぐん）大伴宿禰家持は、その地で永遠の眠りについたのでございます。

それから、およそ1200年余、地鳴りのごとく響き渡る、楽の精霊の調べによって、永き眠りより、その魂を呼び戻させたまえ、目覚めさせたまえ！

（一転して穏やかなギターのアルペジオに重なり、言霊の声が遠くから、黄泉の国に眠る家持の耳に響く）

「シタ、シタ、シタ……シタ、シタ、シタ……」

「音が聞こえる」

「コウ、コウ、コウ……コウ、コウ、コウ……」

「はるか遠くから、声が聞こえる」

「ホドロ、ホドロ、ホドロ……ホドロ、ホドロ、ホドロ……」

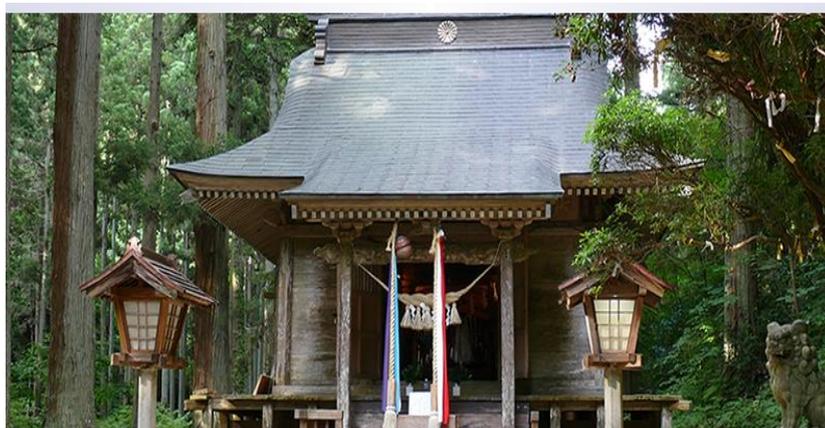
「……クガネ……ハナサク……歌声が、ホドロ、ホドロと雪のように舞い降りてくる」

「シタ、シタ、シタ……コウ、コウ、コウ……ホドロ、ホドロ、ホドロ……」

「何の声か？魂呼びの声？はるか遠くからわが御魂を呼ぶ声？永い眠りから、自分がいつ目覚めたのかわからぬ。凍てつく暗闇のなかで、黒い巖（いわお）の天井が裂け、その割れ目から、鋭く光が射し込んできた。その瞬間、私の身体は、吸い寄せられるように割れ目をすり抜け、宙に舞い上がった。驚いて下を眺めると、陸奥を縦に貫く暗い山々が眼下に広がっていた。そして、その一部、すぐ先の山肌が黄金色に輝いているように見えた。なんだ、あの煌きは？……そこから、あの懐かしい、クガネハナサクの歌声が……」

「天皇（すめろぎ）の 御代（みよ）栄えむと 東（あづま）なる 陸奥山に 金（くがね）花咲く」

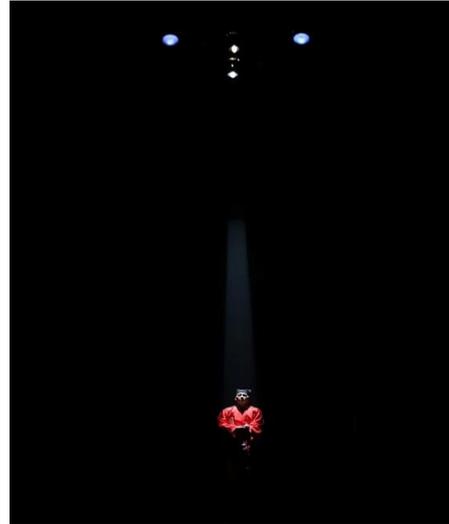
そうでございます。奈良の都、東大寺の大仏に塗る金が、陸奥の小田で見つかったことを祝って、家持さまご自身が詠まれた歌にございます。万葉集中この歌が最も北を詠んだ歌となりました。都に金を献上した年には、この地に黄金山神社が建立され現在も残っておりますが、家持さまの目には、この黄金山が輝いているように見え、家持さまの耳には、その「金花咲く」の歌が響いたのでございましょう。



黄金山神社
宮城県遠田郡湧谷

「シタ、シタ、シタ……シタ、シタ、シタ……」

「再び聞こえたあの遠くからの呼び声に引かれるかのごとく、私は、一転して空を滑るように飛翔を始めた。陸奥上空を南方に向かって、海沿いに飛翔していることが分かった。左手には暗闇に果てしなく続く海が、右手には夕景を背にした黒々とした山脈の稜線が、流れ飛んだ……しかし、何だ。私の眼下に広がる光景は……暗く荒れ果てた海岸が陸にまで広がっている。これまで目にしたことのない荒涼たる光景だ。荒々しい渦に呑み込まれ、洗い流された草原の跡だ。そして、また、その荒野から、これもまた昔懐かしい、あのなんともない歌声が聞こえたような気がした……」



大伴家持 和泉元彌

「陸奥の 真野(まの)の草原(かやはら) 遠けども 面影にして 見ゆといふものを」

(陸奥の国の 真野の萱原は 遠くても 面影として 見えると言いますのに) 笠郎女(巻3・396)

はい、家持さまが、笠郎女さまから贈られた相聞歌でございます。家持さまは、笠郎女さまから 29 首もの熱い恋歌を贈られたのにもかかわらず、遠く別れてからつれない歌 2 首を返しただけにございました。陸奥の真野は、現在の福島県南相馬市真野地区、大震災で大きな津波被害を受けたのでございます。この真野からほど近いところに原子力発電所なる建屋があったのです。家持さまはこの時何か異常を感じたようでした。

「なんだ、この不穏な感触は…得体のしれない異物が、かすかに私の皮膚を刺し、身体の中を突き抜けていった。何だ、この気味悪い気配は？……」

ふと、目を先に移すと、暗闇の中に壊れた巨大な廃屋が浮かび上がってきたのです。その周辺には、これも大きな円い筒を立てたとき怪しげな蔵が延々と並んでいるのが見えたのでございます。

「コウ、コウ、コウ……コウ、コウ、コウ……」

「何か奇っ怪な感触だけを残して、その不気味な光景は後方に飛び去った。矢を射るかのような勢いは、さらに速度を増している……私の耳に届いてくるのは、あの声だけ……」

「ホドロ、ホドロ、ホドロ……ホドロ、ホドロ、ホドロ……」

「歌が呼んでいる、この私を呼ぶ声が聞こえる。瞬きをするだけで、何十里もの風景が流れ飛ぶ……もしかすると、この辺りは、手兎奈がいた下総国か、その南、海に突き出たのが珠名の国、上総か……と、すぐ目前に一面の明かりが、ものすごい勢いで私に迫ってくるのが見える。一瞬にして、それはたちまち私の視野いっぱいを埋め尽くす大きさとなった。まるで火の海のような光の大地！灯火だ、これは延々と続く街の灯火……それが、光る海となって、私を照らしている。なんという壮絶な光景、これはいったいどこなのか？……もしかしたら、武蔵の国……いや、そんなはずはない……危ない！その時、眼前に、突然天上に届かんばかりの巨大な火の見櫓が現れ、それに突き当たりそうになって落下し、私は再び気を失った……」

「シタ、シタ、シタ……コウ、コウ、コウ……ホドロ、ホドロ、ホドロ……」

「その声、たしかに私を呼ぶその声に導かれて……私は、目を開いた」

「大伴家持さまでいらっしゃいますね？」

「はい、大伴宿禰家持にございますが……あなた様は？」

「言霊の精霊にございます」

「言霊の……精霊……？」

「はい。言霊の力で、死せる者たちの靈魂を呼び戻す精霊……言霊の精霊にございます」

「言霊の精霊に、私は、呼び戻された、と言われるのですか？」

「はい、あなた様をはじめ皆さま方を、この現世（うつしよ）に、私の言霊により呼び戻したのでございます」

「現世？この現世（げんせ）に呼び戻して下さったと言われるのですか？」

「そうです。あなた様には是非戻っていただかなければならなかったのでございます」

「戻らねばならぬ……して、ここはどこにございますか？」

「かつては武蔵国、現在は東の京都、東京の浅草は浅草寺（せんそうじ）にございます」

「誠に、武蔵国にございますか？……あの荒れ野ばかりだった武蔵の国に、なにゆえ天に届かんばかりの火の見櫓が……して、その下にある浅草寺とは？」

「はい、この塔は、東京の『天上の樹』と申しているようにございます……また、浅草寺は、その歴史をたどると、家持さまと同じ万葉の時代にさかのぼるのでございます」

「万葉の時代に……？」

「はい、そうでございます。あおによし奈良の都で万葉集冒頭の舒明天皇の歌が詠われた頃、武蔵国の宮戸川、現在の隅田川にございますが、この宮戸川で漁師の網にかかった聖観音像が祀られ供養されたのが浅草寺の始まりとされているのです。ともに 1400 年近い長い歴史を持つ万葉集と浅草寺にございます」

「では、私が奈良の都から東国を経て陸奥の多賀城に下った折、すでに浅草寺は、この東国、武蔵国にあったと言われるのですか？」

「はい、その通りにございます」

「ならば、その途次立ち寄ってみたかったものじゃ」

「ところで、浅草寺のお参りをいたしましたら、浅草寺のお隣、浅草公会堂に参ることにいたしましょう」

「浅草公会堂……？」

「はい。皆さま、お待ちかねにございます」

「皆さま？……皆さまとは？」

「坂上郎女さまや大嬢（おおいらつめ）さまにございます」

「叔母さまやわが妻大嬢にございますか？」

万葉の時代からおよそ 1300 年後、家持黄泉がえりのファンタジアの始まりである。



東京 浅草寺